Celestial Misfits

For adult only

MECHI

Contents

seventh heaven 3

ピルグリム 35

金曜日の天使 86

このたびは、当同人誌を
お手にとっていただき、誠にありがとうございました。
お手に取って読みたいと思っていただき、ありがたく思います。

この本は、2022 年に発行した同人誌を受注頒布用に整えたものです。
お楽しみいただけましたら幸いです。

seventh heaven

ヴァンパイアハンターの家系に生まれてしまった僕の人生が、最初から最期までヴァンパイアと無縁でいられるはずがなかったのは当然の宿命なのかもしれないけれど。
これは、有史のヴァンパイアに関わる者達の中でも特に数奇な運命を辿った…と思う僕の話だ。

僕はイギリスの片田舎に生まれた。
家は町から離れた不便な所にある大きな館で、ウェセックス王国時代の後期に作られたとかでとにかく古かった。家系は古くからの地主で貴族の端くれだけど、何代前かの先祖がモンスター退治を生業にし始めてからそういう家になったらしい。（と言っても実情は資産家だし、怪物退治なんて片手間の道楽に過ぎなかっただろう。）
外で遊び回るより読書が好きな僕は、幼い頃から家の中で本ばかり読んでいた。うちの蔵書は豊富で、読んでも読んでも未読は尽きない。それらに加え、稼業に関わるモンスターにまつわるものや古今東西の魔術書のような怪しい本が豊富で、そういった知識を素直に吸収していった。
こんな具合だから、友達はいなかった。誰かと遊ぼうにも町まで出ないといけなかったし、わざわざ不気味な館まで遊びに来るような子もおらず（うちの稼業的にも、大人達があそこには近づくなと言っていたかもしれない）、兄弟姉妹もいない僕は一人ぼっちだった。
本があったから平気だったけれど。
父は厳格な人で、ヴァンパイアハンターという仕事を天命とばかりに心血を注いでいた。母は綺麗な優しい人だったが、厳しい父に常に怯えていたことくらいしか覚えていない。
子供の頃は、幼心にヴァンパイアという人の血を吸う怪物がいて、父はそれらを退治している（本当にしていたかは定かではない）ということだけわかっていた。けれど、実際にヴァンパイアを見たことがない僕